

# 地位へのマッチングからみる賃金格差の生成過程

—— 企業規模と雇用形態に着目して ——

麦山 亮太

(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

mugiyama@l.u-tokyo.ac.jp

表1 企業規模および雇用形態別変数の記述統計量

	大企業	中小企業	正規雇用	非正規雇用
時間あたり賃金	2119.14 (1147.63)	1374.86 (847.35)	1927.54 (1038.12)	929.24 (565.30)
対数時間あたり賃金	7.49 (0.62)	7.06 (0.58)	7.42 (0.56)	6.70 (0.49)
入社時年齢	27.13 (9.66)	31.96 (10.73)	27.58 (9.55)	36.81 (10.37)
外部経験年数	7.34 (8.86)	10.32 (9.46)	8.39 (9.43)	11.21 (8.81)
間断なし	0.883	0.853	0.874	0.839
就業中断経験	0.235	0.373	0.183	0.682
女性	0.417	0.517	0.333	0.872
配偶者あり	0.738	0.697	0.700	0.724
女性×配偶者あり	0.276	0.370	0.205	0.672
中学	0.030	0.106	0.075	0.084
高校	0.515	0.634	0.555	0.685
高専短大	0.107	0.087	0.075	0.140
大学大学院	0.347	0.174	0.295	0.091
年齢	41.57 (10.29)	42.44 (10.94)	41.68 (10.62)	42.82 (11.03)
勤続年数	12.22 (9.50)	9.79 (8.82)	12.49 (9.44)	5.72 (6.10)
都道府県別最低賃金	662.02 (33.94)	656.17 (34.35)	658.28 (34.07)	659.23 (34.69)
N	821	1351	1606	670

注) 値は平均値を、括弧内は標準偏差を示す。

表2 大企業／中小企業へのマッチングと賃金決定に関するスイッチング回帰モデル

	マッチング関数 (大企業)		賃金関数	
			大企業	中小企業
入社時年齢	-0.119***	(0.017)		
入社時年齢 2 乗/100	0.118***	(0.024)		
外部経験年数	0.021***	(0.004)		
間断なし	0.071	(0.069)		
就業中断経験	-0.099	(0.069)		
女性	0.249*	(0.107)	-0.165*	(0.067)
配偶者あり	0.325***	(0.089)	0.053	(0.058)
女性×配偶者あり	-0.159	(0.127)	-0.376***	(0.079)
高校	0.618***	(0.126)	-0.007	(0.097)
高専短大	0.889***	(0.154)	0.043	(0.111)
大学大学院	1.200***	(0.138)	0.073	(0.104)
年齢			0.067***	(0.014)
年齢 2 乗/100			-0.060***	(0.016)
勤続年数			0.023***	(0.005)
勤続年数 2 乗/100			-0.036*	(0.016)
対数都道府県別最低賃金			1.521***	(0.285)
切片	0.767*	(0.298)	-3.730*	(1.859)
セレクション項			0.463***	(0.040)
$\rho$			-0.820	(0.036)
$\sigma$			0.566	(0.026)
N	2172		821	1351
$R^2$			0.550	0.360
Log likelihood			-2640.433	
$\chi^2$ test				
(vs. $\sigma_{1u} = 0, \sigma_{0u} = 0$ )			64.42***	

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$  (Two-tailed tests)

注) 値は係数, 括弧内は標準誤差を示す。割当関数の係数はプロビット・モデルの係数を意味する。セレクション項は逆ミルズ比により定義され, 値が高いほど大企業となりやすいことを意味するように, 大企業については符号を反転している。 $\sigma$  は賃金関数の誤差項の標準偏差を,  $\rho$  は賃金関数と割当関数の誤差項の相関をそれぞれ意味する。

表3 正規雇用／非正規雇用へのマッチングと賃金決定に関するスイッチング回帰モデル

	マッチング関数 (正規雇用)		賃金関数	
			正規雇用	非正規雇用
入社時年齢	-0.107***	(0.023)		
入社時年齢 2 乗/100	0.075*	(0.031)		
外部経験年数	0.018**	(0.007)		
間断なし	0.221*	(0.094)		
就業中断経験	-0.390***	(0.085)		
女性	-0.568***	(0.116)	-0.009	(0.044)
配偶者あり	0.810***	(0.127)	0.129***	(0.035)
女性×配偶者あり	-0.806***	(0.155)	-0.231***	(0.053)
高校	0.121	(0.128)	0.289***	(0.046)
高専短大	0.034	(0.158)	0.467***	(0.061)
大学大学院	0.607***	(0.154)	0.522***	(0.049)
年齢			0.060***	(0.010)
年齢 2 乗/100			-0.054***	(0.012)
勤続年数			0.020***	(0.004)
勤続年数 2 乗/100			-0.032**	(0.012)
対数都道府県別最低賃金			2.044***	(0.217)
切片	2.819***	(0.398)	-7.816***	(1.409)
セレクション項			0.233***	(0.036)
$\sigma$			0.461	(0.010)
$\rho$			-0.507	(0.070)
N	2276		1606	670
$R^2$			0.394	0.142
Log likelihood			-2280.626	
$\chi^2$ test				
(vs. $\sigma_{1u} = 0, \sigma_{0u} = 0$ )			29.48***	

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$  (Two-tailed tests)

注) 表2に同じ。セレクション項は値が高いほど正規雇用となりやすいことを意味するように, 正規雇用については符号を反転している。

## 謝辞

分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「2005 年 SSM 日本調査, 2005」(2015SSM 研究会データ管理委員会)の個票データの提供を受けた。

本研究は SSJDA 参加者公募型二次分析研究会「現代日本の格差と不平等に関するデータの二次分析」における成果の一部である。研究会では参加者のみなさまから多くのコメントをいただいた。分析の内容の一部は 2016 年 8 月の 2015 年 SSM 研究会全体会議でも報告し、フロアの方々より有益なご指摘をいただいた。以上、記して感謝申し上げる。

## 参考文献 (スライドで提示したもののみ)

- [1] 有田伸, 2016, 『就業機会と報酬格差の社会学——非正規雇用・社会階層の日韓比較』東京大学出版会。
- [2] Eliason, Scott R. 1995. “An Extension of the Sørensen-Kalleberg Theory of the Labor Market Matching and Attainment Processes.” *American Sociological Review* 60(2): 247–71.
- [3] Granovetter, Mark. 1981. “Toward a Sociological Theory of Income Differences.” Pp. 11–48 in *Sociological Perspectives on Labor Markets*, edited by Ivar Berg. London: Academic Press.
- [4] Hodson, Randy and Robert L. Kaufman. 1982. “Economic Dualism: A Critical Review.” *American Sociological Review* 47(6):727–39.
- [5] Imai, Jun and Yoshimichi Sato. 2011. “Regular and Non-Regular Employment as an Additional Duality in Japanese Labor Market: Institutional Perspectives on Career Mobility.” Pp. 1–31 in *Japan’s New Inequality: Intersection of Employment Reforms and Welfare Arrangements*, edited by Yoshimichi Sato and Jun Imai. Melbourne: Trans Pacific Press.
- [6] Keizer, Arjan. 2008. “Non-Regular Employment in Japan: Continued and Renewed Dualities.” *Work, Employment and Society* 22(3):407–25.
- [7] Morris, Martina and Bruce Western. 1999. “Inequality in Earnings At the Close of the Twentieth Century.” *Annual Review of Sociology* 25(1):623–57.
- [8] 尾高煌之助, 1984, 『労働市場分析——二重構造の日本的展開』岩波書店。
- [9] Rebeck, Marcus E. 2005. *The Japanese Employment System: Adapting to a New Economic Environment*. Oxford: Oxford University Press.
- [10] Rosenbaum, James E. 1986. “Institutional Career Structure and the Social Construction of Ability.” Pp. 139–72 in *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, edited by John G. Richardson. Greenwood.
- [11] Sørensen, Aage B. and Arne L. Kalleberg. 1981. “An Outline of a Theory of the Matching of Persons to Jobs.” Pp. 49–74 in *Sociological Perspectives on Labor Markets*, edited by Ivar Berg. London: Academic Press.
- [12] 氏原正治郎, 1966, 『日本労働問題研究』東京大学出版会。